

大正八年一月、太郎は東京で勉強がしたいという理由で鳥羽造船所を退社し、二人の弟が待つ東京に向かった。通と敏男は勤めていた古本屋を辞め、勤務期間が短かったことからそれぞれの店と悶着も起きたものの、繁男が朝鮮から送ってきた千円を元手に開業の準備を進めた。

三人書房

その古本屋は三人書房と名づけられた。本郷区駒込林町六番地、通称団子坂上に開業したのは大正八年二月のことである。しかし経営は軌道に乗らず、太郎を慕っていた鳥羽造船所時代の同僚二人が転がり込んできたうえ、朝鮮からきくと玉子が上京して住人に加わった。十一月には太郎が鳥羽で知り合った小学校教員、村山隆子を東京に迎えて結婚したため、三人書房の一階と二階には一時期八人が寝起きすることになった。

『蒼太の美学』には三人書房を回想した通の言葉が書きとめられている。

「大正の末、兄の古本屋時代——、ぼくも一緒に住んでいたが、ひどい貧乏だった。古本屋と云つても、店開きの時の本だけで、補充がきかない。その日その日に追われていました。売れるに従ってだんだん店の棚のあちこちが穴だらけになって、それではモウお客が寄りつかない。そこで、昼間は店を閉めたきりで、兄と焼芋を嚙りながら、寝ころんで講談本なんか読んでいた」

「それから、夜になると、大八車を借りてきて、残った本を積み上げ、上野まで露天の夜店に出たんです。そんなことで辛うじて食いつないでいた。兄は、なんと云つてもあの通りの気概のある人物ですから、車の楯棒をとる。ぼくは後ろから押した。悲しいかな、途中、坂にかかる、ぼくは足が短かくて腰が弱いから、それはとても辛いことでした」

推理作家の鮎川哲也が昭和五十八年、関係者から取材してまとめた平井蒼太の短い評伝には、弟の本堂敏男が語った三人書房の思い出が記されている。

「兄（蒼太氏）とわたしで相談をして、銀座に夜店をだしたら売れるだろうということになりました。店を開いたのはいいのですが兄弟喧嘩を始めまして、怒ったわたしは兄を残して電車で帰ってしまいました。兄が古本を積んだ重たい大八車を引いて、ふうふういいながら真夜中に帰って来たことを覚えています」

『幻の探偵作家を求めて』に収められたこの簡略な評伝では、鮎川哲也が再現した敏男の言に明らかな間違いがあり、鮎川自身の文章にも首を傾げざるを得ない箇所が見られるが、三人書房を経営した当事者の証言としてここにとりあげておく。

三人のうち残りの一人、太郎は太郎で『貼雑年譜』にこんな述懐を残した。

二人ノ弟ハ別トシテ、太郎ハ何モ古本屋デ大成シヨウトイフ訳デハナク、年少ノ二人ノ手伝ヒヲシテヤツテ、ソノ代リ「勉強」中ノ生活費ヲ得ヨウトシタノデア。併シ生活費ヲ貰フドコロカ、結果トシテハ、私ガ二人ノ弟ノ事業ヲツブシテシマツタヤウナ形トナツタノデア。

大正九年十月、太郎は大阪時事新報の編集記者となり、これを機に三人書房は廃業された。新聞広告を出すと六百円で売れ、あとにはパン屋が店を開いた。太郎は東京を去り、朝鮮から帰って大阪府北河内郡守口町八〇一番地に住んでいた繁男の家に移ったが、『貼雑年譜』には同居家族として父、母、玉子、太郎、隆子が記されているだけで、通と敏男の名は見えない。